



仲本氏庭園は、19世紀前半の琉球王府治世下の八重山において、頭職を輩出した仲本家の屋敷内に築造された庭園である。作庭時期の記録はないが、19世紀中頃と推定されている。

八重山には庭作りに関する古文書が伝わるほか、19世紀初期の作庭とされる名勝「宮良殿内庭園」「石垣氏庭園」が残されており、ともに日本庭園の伝統様式を踏襲した日本最南端の庭園として著名である。仲本氏庭園も上記2つの庭園様式によく似ており、築山に巨石を据えて枯滝を配し石橋を架けた枯山水庭園である。庭園を

構成する主な材料は琉球石灰岩で、ソテツやフクギなどの植物が植えられている。

仲本氏庭園は、使用される石材や植え込まれた南国特有の植物などから、一見すると琉球独特の庭園と見間違ふが、日本庭園の伝統様式を踏まえつつも、地域の独自性も存分にみられる庭園として、日本及び琉球庭園史において貴重である。

記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財 風俗慣習／祭礼（信仰）

いしがきじまし かむら

石垣島四ヶ村のプーリィ

選択年月日／1993（平成5）年11月26日

保護団体／登野城字会、大川字会、石垣字会、新川字会



石垣四ヶ村とは登野城、大川、石垣、新川の4ヶ村のことで、現在の字にあたる。古くから合同でプーリィ（豊年祭）を催している。プーリィとは、農作物の豊作に感謝するとともに翌年の豊作を祈願する祭祀で、旧暦6月に八重山各地で盛大に行われる。

祭の初日は各村の御嶽で、神司を中心に執り行われることからオンプーリィという。2日目は、新川村の真乙姥御嶽に集い、四ヶ村をあげて盛大に祝うことからムラプーリィという。ムラプーリィでは、各村から村の象徴である旗頭を先頭に参集し、さまざまな芸能を神前に奉納する。その後、「五穀の種子授けの儀」、女性だけで行う「アヒャーマツナ（貴婦人綱）」が行われる。最後に「ツナヌミン」が演じられ、東西に分かれて大綱引を行う。東に登野城・石垣、西に大川・新川が中心となって大綱を引き合う。西が勝つとユー（世）を引き寄せ、ユガフ（世果報）をもたらすとされる。

四ヶ村のプーリィは、全県的に稲作が衰退するに伴って農耕儀礼が簡素化、形骸化していく中で、豊年行事の古い形がよく残されている祭祀である。